

## 第7回これからの北海道立近代美術館検討会議 議事録

日時 令和4年(2022年)12月16日(金) 10時00分~11時20分

場所 Web会議システム ZOOM

出席者 別添「出席者名簿」のとおり

- 議題 1 目指す姿  
2 施設整備方法

### 議事

#### (1) 議題1 目指す姿

##### ア 事務局から資料1に基づき説明 (特記事項)

##### ○資料作成の要旨

- ・目指す姿については、これまでも本検討会議、近代美術館協議会、設置者である道教委からご意見をいただきながら進めてきたところ。今回、いただいた意見を踏まえて、新たにビジョン等を示すもの。
- ・近代美術館が目指す姿をビジョンとして示した上で、使命・役割・取り組んでいく柱を明らかにしていくことが、より道民にとって分かりやすいものになるという考えのほか、近代美術館としても、今後の美術館活動を進める上で大きな指針となるような目指す姿を明確にしていく必要があるという考えの下で、ビジョン等を作成したところ。
- ・コンセプト実現のための手法や機能については、整備方法が定まっていないことから、現時点で記載の全ての機能を網羅できると確定することはできないため、必要な機能の「例」として、今後、施設設備を検討する際の目安とし、具体的な機能は整備方法が確定してから検討していくものとなる。

##### イ 質疑応答等 (有・無) (菊地委員)

これまで回数を重ねて、全体的にまとまっているという印象。調整には色々なご苦労があったかと思う。

気になる点として、ビジョンに「新たな創造へと向かう活力あふれる社会」とあるが、なんとなくは分かるが、どのような社会なのかイメージできない。ビジョンというのは、誰もが想像(ビジュアライズ)できる言葉で書いた方が共有されやすいのではないか。

ミッションの3つ目に、「多様性とサステナブル」とあるが、漢字とカタカナが混在しているのでどちらかに統一した方がいい。例えば、「多様性と持続可能性」や「ダイバーシティとサステナブル」など。また、サステナブルではなく、サステナビリティの方が表現的には合うのでは。また、多様性については、表面的な性別や国籍、深層的な価値観や思考など様々な観点があるので、具体的にどのような多様性を指しているのか、考えておいた方がいい。

コンセプトのキッズだけ、他の言葉に比べてトーンが違うように感じる。フューチャーやネクストジェネレーションのような言葉の方がいいか。

##### (佐々木幸委員)

ビジョンの「新たな創造へと向かう活力あふれる社会」について、何を創造するのかぼやけており、分かりにくいという印象。

コンセプトのキッズは、他のコンセプトと比べると語感に違和感がある。チルドレン、ヤングピープル、ユースなどの言葉もあるか。趣旨については、これで良いかと思う。

##### (佐藤委員)

全体的にまとまりのあるものになったという印象。

以前のビジョンには、「地域の文化を受け継ぎながら」という文言が入っていたかと思う。北海道の美術館

ということであれば、地域性のことも触れた方がよい。

ミッションについては、上手くまとまっており、良いのではないかと。

コンセプトに展示や展覧会の要素として、強い訴えかけの意味でパッションという言葉はどうかと思ったが、ミッションの「アートを紹介した新たな発見や感動体験」という部分に含まれている形になっているので、非常に感心した。能動的なものになっており、とても良い。

先日、近代美術館で開催中の砂澤ビッキ展を拝見した。数多くの砂澤ビッキ展を見てきたが、今回は今まで未公開だった作品が公開されるなど、これまで見てきた中でも出色のものであると感じる。ミッションに「道民に信頼され、親しまれる」とあるが、まさに、今回の展覧会はコレクターなどの信頼の下で実施できたのではないかと。美術館の信頼というのは、ガバナンスや学芸員の調査研究の力があって生まれるものだと思うが、今回の砂澤ビッキ展を見て、これが美術館のあるべき姿であると感じたので、このような展覧会を持続させるべき。ミッションの「感動体験」、「豊かな感性を育み、刺激し続ける」というのを実現していると感じた。砂澤ビッキ展によって、北海道ならではのアートに繋がっていく、今後の可能性を考えさせられた。なおかつ、地域のアートの活性化にも寄与しているのではないかと。つまり、ミッションと今回の砂澤ビッキ展を照らし合わせると、これが美術館としてあるべき姿なのではないかと感じた次第である。

コンセプトで、展覧会のことが抜けているように感じる。コレクションに展示、コラボレーションに多彩な展覧会を開催、ハーモニーに魅力にあふれた多彩な展覧会の開催、と記載されており、展覧会の要素があちこちにあるので、どこかにまとまらないものかを感じる。思い切ってハーモニーの中に展覧会の要素を入れてもいいのではないかと。キッズのラーニング・プログラム、ワークショップは、コラボレーションの「持続的な協働体制の構築」に深く関係するため、コラボレーションの中にこそ、入れて強調してもいいのではないかと。

(北村委員)

ミッションに「感動体験の提供」とあるが、一方的に提供するというよりも、美術館職員、利用者を含めて、全体で体験を共有する、分かち合う、共に体験し合うというニュアンスにしていきたい。公的な文書であれば構わないが、多様性やサステナビリティは難しい言葉なので、小学生でも理解できるような文言の配慮が必要。コンセプトを英語ではなく、例えば、集めてー調べてーみんなをつないでー未来を創るー調和にあふれたー美術館のような言葉にして繋げると小学生でも理解できるのではないかと。その上で、集めるとは具体的にどういうことかというのは、コンセプトのように言葉を並べていけば詳細に分かる、という形もいいのではないかと。キッズという言葉は、悩みに悩んでキッズになったのだと思うが、ネクストくらいがいいのでは。

(佐々木亨委員)

美術館の皆さまが検討したプロセスは、大変ご苦労があったかと思う。敬意を表したい。

今まで自分が、博物館の評価の伴走やマネジメントのアドバイスなどの仕事をする上で一番思うことは、実は現場の職員が一番分かっているということ。現場にしか分からない暗黙知が沢山あるので、我々、委員の違和感があるとしても、そういう方々が検討して出てきた言葉は、それなりに尊重すべきだと思っている。ただし、一番大事なことは、これがゴールではなく、スタートであること。これから運用していく中で、この言葉だと伝わる、伝わらないというのがぼろぼろと出てくるはずなので、その際に、前向きに文言や計画を見直し、ブラッシュアップしていく柔軟性こそが大事。

目指すビジョンの姿が、一人一人の道民において、どのようなアウトカムで現れるのか。道民の便益としてどのような状態になったら、ビジョンに掲げる「アートの普遍的価値の享受」や「活力あふれる社会」の実現に繋がるのか、具体的な部分を共有することが大事。ミッションに関しても、美術館がやるべきことを記載してあるが、利用者や道民にとってどんなアウトカムなのかという翻訳作業は必要。

ミッションは美術館が主語であり、美術館が主導してやっていくことであるが、ビジョンに関しては、近代美術館だけが貢献するわけではなく、他の道内の道立施設も関わってくるため、ミッションとビジョンで作るアウトカムのレベルが違う。ビジョンは、社会全体の一部として貢献していくので、その切り分けは今後の評価や活動の検証に繋がっていく大事なところかと思う。

(事務局)

「新たな創造へと向かう活力あふれる社会」について、美術館が社会にどのような役割を果たせるかを問うていったところ、それは創造力を高めることにある、という考えに至った。アートは人間の創造力のひとつの粹であり、アートの普及や振興は、広く社会の様々な領域の創造力の向上につながるはず。そのような考えに

基づいてこの言葉を入れた。通じにくいというご指摘は受け止めて、より適切な表現を検討したい。

キッズについては、悩みに悩んだ結果、やはりキッズしかない、ということで今回提示したところではあるが、今回の委員の皆さまからの意見を踏まえて、美術館内部でも再度検討したいと考えている。ここがスタートラインだというのは、その通りだと思っている。ビジョン、ミッション、コンセプトをどのように実現させていくか、職員全体でどのように取り組んでいくか、という部分もこれからしっかりと考えていきたい。

(佐々木幸委員)

コンセプトのハーモニー、コレクション、リサーチ、コラボレーションが近代美術館に備わっている機能や属性を表しているのに対して、キッズだけが対象者を表している。言葉が指し示す次元の違いがあるので、キッズだけ少し観点が違うという意識を持てばいいのではないかと。キッズの部分は、エデュケーションやラーンなどの学んでいくという趣旨の属性を表す言葉を入れればいいのか。そういった観点でコンセプト実現のための手法や機能例を見ていくと、キッズの中にラーニング・プログラムがあるが、先ほど、佐藤委員からも意見があったように、コラボレーションにも入るのではないかとというのは、ここだけが対象者を限定しているので、この機能が他にも入り込んでいると感じる。要するに、区分け・分類の問題として、教育、学習などの未来に繋げていくための、コンセプトの実現に対するソフトやハードが被ってしまい、2回書かなければいけない状態になっているのではないかと。述べられていることそのものは、大変結構なことなので、このままで良いが、分類の観点の問題で、こっちに入って、こっちには入らないということが生じていると感じる。

(菊地委員)

先ほど、北村委員が言ったように、平易な言葉で子どもでも分かりやすいように表現していくことが大切。

ビジョン、ミッション、コンセプトに関して、ロジカルにしっかり考えていくというところでは、文字ベースで難しい言葉があってもいいが、同時に、ビジョン等を様々な人に伝えていくことが大事なので、先日のオープンハウスでは、利用者が回答しやすいように工夫して、パネルを用いて分かりやすくしていたと思うが、これも違った編集を通じて、より分かりやすく伝えていけるような工夫が必要。コミュニケーションの手法について、様々な形で検討していくと、子どもでも理解できるようなビジョン等が表現できるのではないかと。

キッズについては、皆さん気になっているようだが、例えば、エデュケーションやエクスペリエンスなどの教育、体験、経験という言葉の方が、他のコンセプトの言葉にも合うように感じた。

(北村委員)

従来、美術館というのは展示、調査研究、収集、教育普及という機能面を全面に押し出すのが美術館だと思われていたのが、今回のコンセプトにおいては、従来の属性とは異なり、展示や教育普及の部分が分散するなど、こういった仕組みのコンセプトが、むしろ面白いと思っている。ただ、キッズの属性が違う、あるいはハーモニーも従来の展示だけではないので、キッズとハーモニーだけがこれまでの展示、調査研究、収集、教育普及と色合いが違う用語にも感じる。その上で、ハーモニーが一番大事で肝だと思っている。

コレクションで、ハード面で実現できるのであれば、収蔵庫を見せる展示室にするのが理想的である。収蔵庫自体を見えるような形で工夫できないか。ビジュアルストレージのような施設が実現できると良い。

(佐藤委員)

コンセプト実現のための手法や機能例のハード面について、4番の項目に「学ぶことができる」という文言を追加したとのことだが、その割には、講堂、映像室、造形室がどこに入るのか分からない。その代わりに、コラボレーションのハード面において「多機能なホール」や「幅広い仕様に開かれた多機能ルーム」とあって、これは含みを持たせて何でも当てはまる形にしているのだと思うが、学ぶためにはこういうことが必要だと、ある程度限定した方が良い気がする。これは今後の施設整備の検討と併せて考えていくものだが、学ぶ機能は、具体的にどこに反映していくのか、という部分はしっかり考えていくべき。

これは驚いたが、コレクションのハード面において、「展示替休館中でも鑑賞可能なコレクションの常設展示スペース」とあるが、大変素晴らしい。休館中でも、コレクションを鑑賞可能な状態にするというのは、非常に良い着眼点である。

## (2) 議題2 施設整備方法

### ア 事務局から資料2に基づき説明

(特記事項)

・なし

イ 質疑応答等 (有・無)

(菊地委員)

施設の整備方法について、様々な手法がある中で大事にすることは、今まさに議論している美術館のあり方、ビジョン等を体現できるものでなければならないと感じる。ハードの整備は、美術館活動とは別とならないように、ビジョン等の実現に向けて繋がるようなプロセスとなるように、意識しなければならないし、ミッションにおいて、多様性(ダイバーシティ)やサステナビリティを謳うのであれば、それに合致したような整備方法にならなければいけないと思う。例えば、ハイブリッドな案として、多様性(ダイバーシティ)や環境性の観点から昔の建築的な価値を残しつつ、新しいテクノロジーを取り入れるなど、色々な手法はある。ビジョンやミッションから紐解いて、今回の整備方法に反映できることも沢山あるのではないかな。ただ、世界的にはスクラップアンドビルドの時代ではないし、近代美術館も構造的にはまだ問題ないとの話なので、世界的な潮流や環境的な側面からも、既存のものを生かす方法でやってほしいというのが、個人的な意見ではある。

(佐藤委員)

近代美術館は建築家の太田実氏が建設した。1.2mのモジュールで高さなどが設計されている。改修となった場合には、モジュールの考え方をどうするのかというのがある。また、建築の特徴として、斜めの梁があるが、複雑な構造になっていると思われるので、感想としては、改修しづらい建物であると感じる。近代美術館の特性をよくよく考えながら、メリット・デメリットを整理して考えるべき。

サウンディング市場調査の中で、改修、改築、新築移転のそれぞれの提案の割合は、どのようなものだったのか、伺いたい。

(事務局)

サウンディング調査の結果は、改修案が5件、改築案が4件、新築移転が13件。現敷地と移転という割合であれば、現敷地9件、移転13件となる。

(佐藤委員)

改修・改築の意見の方が多かったので、新築移転の方が若干多いことに少し驚いた。ポイントとして考えなければいけないのが、三岸好太郎美術館とどのように関係を持たせるか。道民からの意見での、一体的なエリアになったらいいな、という意見があったことから、どのように組み合わせるかがポイントになるのではないかな。

(佐々木亨委員)

道民の意見や民間事業者からの提案など色々な意見が発散しているところであると思うが、いずれそれを近代美術館もしくは道教委として収束する際に、参考となる例として、大阪市が地方独立行政法人を立ち上げたときに当時5館(現在は6館)の博物館全体で、大阪市としてどのようなビジョンと使命で進めるのか、構想を策定した。これは、まさに会議の前半で議論のあった私たちが目指すことと同じ。当然、それを実現するためにハードウェアも関係してくる。ハードがどうあるかで何が実現しやすく、何が実現しにくいのかという状況が生まれる。大阪市の場合も、大阪市ミュージアムビジョンを策定し、ビジョンを実現するためにどのような経営形態がいいのか、直営、指定管理、地方独立行政法人の3つの方法を比較し、論点を整理しながら、だから地方独立行政法人を選択する、という説得力のある資料を作成している。大阪市の場合は、ビジョンを実現するための経営形態だが、今回の我々の場合は、実現するための施設整備となるので、その紐付けはこれから収束する際の重要な観点だと思う。発散すればするほど際限なく広がっていくので、ある時点で上手い整理の仕方を身につけることが大事。そういった意味で、大阪市のやり方は参考になるのではないかな。

(北村委員)

近代美術館協議会委員として、近代美術館の水漏れや結露などの施設の不具合が生じてきている現状を見てきている。もちろん、拙速に進めることは避けるべきで、合理的な検討をした上で整備方法を決めていただきたいが、一方で、作品にとって危機的な状況であるということも意識しながら進める必要がある。ロードマッ

プの作成の必要性も考えてもらえれば。

(佐々木幸委員)

3つの手法、それぞれにメリット・デメリットがあるので、難しい問題だと感じている。今更だが、現在の敷地と知事公邸等が所在する居住区域の両方を活用して、文化的なエリアとして整備して活用することはできないのか。

(事務局)

コストの問題などもあり、中々ハードルは高いと思われるが、今はフラットな状態であるため、今後の検討のなかで考えていきたいところ。

(佐々木幸委員)

現実的に、財政面的には、そこまでの見通しは立たないということは分かった。

どれがいいのか、まったく分からない状態ではあるが、環境負荷の問題や近代美術館が直面している喫緊の問題など様々な問題がある中で、中々判断材料がないという印象。今後、色々な観点で、どんな判断材料があるのか検討していく必要があると考える。

第7回これからの北海道立近代美術館検討会議 出席者名簿

○ 構成員

(敬称略、五十音順)

所 属	職	氏 名	備 考
株式会社 haku	代表取締役	菊地 辰徳	
北海道大学	名誉教授	北村 清彦	
北海道教育大学釧路校	教 授	佐々木 宰	
北海道大学大学院文学研究院	教 授	佐々木 亨	
前札幌芸術の森美術館	館 長	佐藤 友哉	

○ 事務局

所 属	職	氏 名	備 考
北海道教育庁	生涯学習推進局長 (兼) 道立近代美術館担当課長	山上 和弘	座長
北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課	課 長	高見 里佳	
	課長補佐	遠藤 新理	
	主 事	伊藤 拓朗	
	主 事	宮下 直之	
北海道立近代美術館	副 館 長	松田 俊也	
	学芸副館長	中村 聖司	
	総務企画部長	豊村 洋	
	学芸部長	五十嵐聡美	
	学芸統括官	土岐美由紀	
	総務企画課長	今村ちぐさ	